

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03297

研究課題名（和文）パーソナリティ特性による精神・身体・社会健康および適応状態の予測可能性

研究課題名（英文）The predictability of mental, physical, and social health and adaptive status by personality traits

研究代表者

谷 伊織 (TANI, Iori)

愛知学院大学・心理学部・准教授

研究者番号：10568497

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では疫学的パーソナリティ研究の視点より、一般成人を対象とした5年間の縦断Web調査と小中学生の児童を対象とした4年間の縦断調査を行い、パーソナリティ特性から将来のメンタルヘルスや身体的健康、対人関係などの社会適応状態を予測可能であるかどうかを検討した。その結果、一般成人においては5因子パーソナリティ特性が4年後のメンタルヘルスや身体的健康、対人関係、就業状況等の社会適応状態と有意に関連しており、児童生徒を対象とした調査においても同様に3年後の自尊心との関連性が認められた。従って、国内においても5年程度のスパンにおけるパーソナリティ特性による適応指標の予測可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

海外においてはパーソナリティ変数による将来の適応や不適応に関する研究は数多く存在しており、変数の種類や規模も大きいものが多いが、国内においては十分に蓄積されていない。また、その知見は横断調査の結果に偏っており、縦断調査が少ないのが実情である。本研究では2つの縦断調査に基づいてパーソナリティ特性と将来の結果変数との関連を検討しており、基礎的な知見を蓄積するために有益であると考えられる。国内においても疫学的パーソナリティ研究を展開することによって大きなメリットがあることを示し、今後のパーソナリティ研究を展開する価値を高めることができると考えられる。

研究成果の概要（英文）：From the perspective of epidemiological personality research, we conducted a 5-year longitudinal web-based survey of general adults and a 4-year longitudinal survey of elementary and junior high school children. Our goal was to examine whether personality traits can predict future social adjustment statuses such as mental health, physical health, and interpersonal relationships. The results showed that five-factor personality traits were significantly related to mental health, physical health, interpersonal relationships, employment status, and other social adjustment statuses four years later in general adults. Similarly, these traits were related to self-esteem three years later in the survey of children. Thus, the predictability of adjustment indices based on personality traits over a span of about 5 years was demonstrated in Japan.

研究分野：パーソナリティ心理学

キーワード：パーソナリティ Big Five 社会的適応 精神的健康

## 1. 研究開始当初の背景

近年、パーソナリティ特性の5因子モデル(Big Five)が世界的に広く用いられるようになり、このモデルを用いた大規模縦断調査研究が展開され、それらの結果をメタ分析によって総括した報告が多くなされるようになった。その結果、継時的に安定しているパーソナリティ特性が、社会的に問題があると考えられる結果変数(自殺や自傷行為、不登校やひきこもり、精神疾患・犯罪や暴力など)に対して頑健な予測力を有することが明らかとなり、問題への早期介入や心理的健康の増進等の可能性を検討する研究が国際的に盛んとなっている(e.g. Krueger, Caspi, & Moffitt, 2000)。また、児童期のパーソナリティ特性が20年後の心理的適応・社会的適応・学業達成・職業達成などと $|.20| - |.40|$ 程度の相関をもつことや、勤勉性の高さが知的能力(IQ)と同程度に学力を予測すること、IQや社会経済地位や家庭環境の影響を考慮してもなおパーソナリティ特性による結果変数への影響が認められることなどが示されている。ノーベル経済学賞受賞者である Heckman et al.(2013)はこれらのパーソナリティ特性のことを非認知能力と呼び、認知能力(IQ)よりも経済・労働市場において予測的妥当性が高い概念であり、教育などによる介入が可能であると提唱したため、パーソナリティ特性の予測力が世界的に注目される気運が高まり、わが国においても教育・産業界において広くこの概念が知られるようになった。

## 2. 研究の目的

このように、諸外国においてはさまざまな大規模コホート研究に基づいた多くの報告が存在し、その有用性が認められているが、国内における研究成果は他国と比べると十分に蓄積されていないのが実情である。そこで、本研究では疫学的パーソナリティ研究の観点からの縦断研究デザインに基づいて、問題があると考えられる結果変数をパーソナリティ特性から予測する可能性を検証することを目的とする。先行研究ではパーソナリティ特性が成人期の身体的・社会的・経済的な充実度合いを説明する力が高いことが指摘されているため、特に成人期の身体的・社会的適応状態がパーソナリティ特性からどの程度説明できるのかを注視する。また、疫学的パーソナリティ心理学研究の核となるのは児童期の研究成果であるが、児童期の研究は特に他国と比べて脆弱であるため、児童期にも成人期と同じ説明モデルが適合するかどうかを調べる。

## 3. 研究の方法

疫学的パーソナリティ研究としては、幼少期より10年以上の長期にわたる縦断研究が望ましいが、3~5年程度の縦断研究も多く存在し、数年間のスパンであっても一定の予測力があることが示されている。そこで、本研究では一般成人を対象とした5年間の縦断調査、児童生徒を対象とした4年間の縦断調査を行い、メンタルヘルス、身体的健康、社会的適応状態等とパーソナリティ特性の関連を検討した。

## 4. 研究成果

第1の研究成果として、主に縦断調査に基づいたパーソナリティ特性による社会適応・不適応行動、心身の健康状態の予測に関する研究の現状および問題点について、国内外の文献を収集し、レビューを行った。また、5因子特性以外にも幅広くパーソナリティの概念について扱った。これらを一部はBig Fiveハンドブックに収録された。

第2の研究成果として、5因子モデルとその発展形となる、性格特性を測定するための心理尺度のモデルについての検討を行った。具体的には、双因子モデルと呼ばれる因子分析モデルに基づいて一般因子を抽出したモデルと、従来の因子相関モデル、高次因子分析モデルの比較検討を行い、因子構造の検討を行った。次に、児童生徒を対象としたメタ認知を測定する心理尺度として、4つの場面ごとに3種類のモニタリングを簡便に測定するためのセルフモニタリング尺度の開発と信頼性および妥当性の検討を行った。36項目を用いた本人評定によるデータを対象として因子分析を行った結果、想定どおりの因子構造を見出すことができた。一部の低位尺度は低かったが、概ね各低位尺度の信頼性も十分であった。また、性差と発達の変化についても検討した。これらの結果は日本教育心理学会および日本パーソナリティ心理学会において発表された。

第3の研究成果として、一般成人を対象とした5年間のオンライン縦断調査を行い、分析を行った結果、パーソナリティ特性によって将来の自尊感情などの精神的健康、心身の不適応感などの適応・不適応指標の予測可能性が検討された。先述の5因子パーソナリティ特性と自尊感情と身体的不健康感との関連を相関分析と重回帰分析によって検討した結果、5因子パーソナリティ特性からいずれも予測・説明が可能であった。また、これは階層的重回帰分析および構造方程式モデリングによって年齢や性別を統制して検討してもなお十分な説明力を有していることが明らかとなった。また、パーソナリティの一般因子を用いた検討を行った場合、一般因子からも高い説明力が確認された。

第4の研究成果として、小中学生を対象とした本人評定の縦断調査データを分析した結果、パーソナリティ特性およびメタ認知によって、自尊感情や対人関係などの適応・不適応状態が予測

可能性であるかどうかについて検討した。先述の 5 因子パーソナリティ特性との関連を検討したところ、5 因子パーソナリティ特性およびパーソナリティの一般因子との関連性が示された。また、階層的重回帰分析と構造方程式モデリングによる分析の結果、学年や性別を統制してもなお十分な説明力を有していることが明らかとなった。海外の研究においては、統制性 (Conscientiousness, 勤勉性, 誠実性) と呼ばれるパーソナリティ特性が特に将来の適応・不適応を予測する力が高いことが複数の論文において報告されているが、本研究においても同様の傾向がみられた。この結果は感情心理学会およびパーソナリティ心理学会にて発表された。

〈引用文献〉

- Heckman, J., Pinto, R., & Savelyev, P. (2013). Understanding the mechanisms through which an influential early childhood program boosted adult outcomes. *American Economic Review*, 103(6), 2052-2086.
- Krueger, R.F., Caspi, A. & Moffitt, T.E. (2000). Epidemiological personology: The unifying role of personality in population-based research on problem behaviors. *Journal of Personality*, 68, pp. 967 - 998

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 谷伊織	4. 巻 47
2. 論文標題 パーソナリティと生き生き働く状態の関連性 - プロトタイプと一般因子による検討 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Works Discussion Paper	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷伊織	4. 巻 2
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症流行下の行動変容とメンタルヘルス、パーソナリティの関連性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 愛知学院大学心理学部紀要	6. 最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 谷伊織・大嶽さと子・永田雅子
2. 発表標題 小中学生のセルフモニタリングと自尊感情の関連 階層的因子分析モデルに基づく検討
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第31回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷伊織
2. 発表標題 成人期の自尊感情の変化と生活習慣およびBig Five パーソナリティ特性の関連
3. 学会等名 日本感情心理学会第30回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷伊織・太幡直也・松岡弥玲・熊谷朋美・杉谷萌野
2. 発表標題 制御焦点の発達の变化—日本語版Regulatory Focus Questionnaire (RFQ-J)を用いた検討
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷伊織・太幡直也・松岡弥玲・熊谷朋美・杉谷萌野
2. 発表標題 制御焦点とパーソナリティの関連 Big FiveとDark Triadによる検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤倫・小嶋理江・谷伊織・北折充隆
2. 発表標題 事故回避不能状況における行動判断に関する研究(4) 事前説明をふまえた自動運転A Iに対する個人の志向
3. 学会等名 日本交通心理学会第 87 回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 lori TANI
2. 発表標題 Developmental Changes in Personality and Self-Monitoring among Japanese Children
3. 学会等名 Society for Personality and Social Psychology annual convention 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷伊織
2. 発表標題 パーソナリティ特性と身体的健康，自尊感情の関連
3. 学会等名 日本感情心理学会 第29回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷伊織・大嶽さと子・永田雅子
2. 発表標題 小中学生の自尊感情とパーソナリティの関連
3. 学会等名 日本教育心理学会 第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 天谷祐子・谷伊織
2. 発表標題 性格特性の5因子と動機づけ始発方略の関連
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小塩真司（企画）・下司忠大（話題提供）・吉野伸哉（話題提供）・西田裕紀子（話題提供）・高橋雄介（話題提供）・谷伊織（指定討論）
2. 発表標題 日常社会の中のパーソナリティ特性（日本心理学会第84回大会公募シンポジウム）
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大嶽さと子・谷伊織・永田雅子・吉橋由香・田倉さやか
2. 発表標題 児童の自尊感情と学校生活との関連
3. 学会等名 日本教育心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷伊織・大嶽さと子・吉橋由香・田倉さやか・永田雅子
2. 発表標題 小学生のセルフモニタリングの発達の变化と安定性
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大嶽さと子・谷伊織・吉橋由香・田倉さやか・永田雅子
2. 発表標題 児童のセルフモニタリングと学校生活との関連
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 IORI TANI
2. 発表標題 Construct validity of a short form of the Big Five scale in Japan.
3. 学会等名 Conference of the International Society for the Study of Individual Differences 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計3件

1. 著者名 石井秀宗・滝沢龍（編著）・シュレンベル レナ・出野美那子・稲吉玲美・齋藤信・中村杏奈・谷伊織・野村あすか・川本哲也・天井響子・二村郁美・山内星子・浦野由平・鈴木雅之・伊藤大幸	4. 発行年 2021年
2. 出版社 医歯薬出版	5. 総ページ数 248
3. 書名 公認心理師カリキュラム準拠 臨床統計学 [心理学統計法・心理学研究法]	

1. 著者名 鈴木公啓（編）・谷伊織	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 232
3. 書名 第1章 近年の主要な諸理論 ビッグファイブとその周辺, パーソナルコンストラクト 鈴木公啓（編） 要説パーソナリティ心理学: 性格理解への扉	

1. 著者名 谷伊織・阿部晋吾・小塩真司（編著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 Big Fiveパーソナリティ・ハンドブック 5つの因子から「性格」を読み解く	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	永田 雅子  (NAGATA Masako)  (20467260)	名古屋大学・心の発達支援研究実践センター・教授    (13901)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大嶽 さと子  (OHTAKE Satoko)  (10611436)	名古屋女子大学短期大学部・その他部局等・教授    (43934)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関